

2021. 6. 20 (日) マタイ26:1~5

<説教>

イエスが〈すべて語り終え〉られた〈これらのことばすべて〉(26:1)とは、24章4節から25章46節までに記されているところの、ご自分が再びこの地上に来られて世を終わらせる時についての教えのことと思われまます。

その教えの最後は〈人の子〉、イエスご自身が〈その栄光を帯びてすべての御使いたちを伴って来〉て、〈その栄光の座に着〉き、〈すべての国の人々〉を〈御前に集め〉て最後の審判を行われるということでした(25:31-46)。

そのように、ご自分を再び来られる〈栄光〉に満ちた最終審判者なる〈人の子〉だと弟子たちに明らかになされたすぐ後で、〈人の子は十字架につけられるために引き渡されまます〉とイエスは言われました。

ガリラヤにいたときからイエスは〈ご自分がエルサレムに行つて、長老たち、祭司長たち、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、三日目によみがえらなければならないことを、弟子たちに示し始められ〉(16:21)、〈人の子も、人々から苦しみを受けることになります。〉(17:12)、〈人の子は、人々の手に渡されようとしています。人の子は彼らに殺されるが、三日目によみがえります。〉(17:22,23)と既にお語りになっていました。

「ご覧なさい。わたしたちはエルサレムに上つて行きます。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡されます。彼らは人の子を死刑に定め、異邦人に引き渡します。嘲り、むちで打ち、十字架につけるためです。しかし、人の子は三日目によみがえります。」と〈イエスはエルサレムに上る途中、十二弟子だけを呼んで、道々彼らに話された。〉(20:17-19)のです。

このようにイエスご自身は〈十字架につけられるために引き渡され〉ることに向かつて進んでおられ、そのためにこそエルサレムに来られたのです。

そしてご自分が〈十字架につけられるために引き渡され〉るのは〈二日たつと過越の祭り〉になるその時だとイエスははっきりと弟子たちにお知らせになりました。

ご自分が〈十字架につけられる〉のが〈過越の祭り〉と偶然同じ時になるというのではなく、ご自分の〈十字架〉によって〈過越〉の真の意味が明らかになる、〈過越〉が成就されるとイエスは言われたのです。

〈過越の祭り〉はユダヤ人にとって一番大事な祭りであり、弟子たちが〈知っているとおりのこと〉、自分たちはまさに今年も〈過越の祭り〉をするためにエルサレムに来たと弟子たちは思っていました。

昔、神がご自分の民イスラエルをエジプトの奴隷から解放しお救いになるときに、エジプトにいるすべての長子・初子を殺すわざわいをお下しになるので、イスラエルの民は家ごとに一頭の子羊を殺してその血を家の門柱と鴨居に塗っておけば神がその血を見てイスラエルの民の家は〈過越〉され、エジプトと区別してくださり、わざわいから救ってくださったことを記念して感謝する祭り、それが〈過越の祭り〉でした。

家ごとに一頭の子羊を殺して家族全員で食べて、出エジプトを思い起こし、救われ神の民とされたことを神に感謝するのです。

そのときの弟子たちはとても理解することはできませんでしたが、イエスはこの〈過越〉の子羊と〈十字架につけられるために引き渡され〉るご自分を重ね合わせられたのです。

〈私たちの過越の子羊キリスト〉（I コリント 5:7）によって悪魔と罪の奴隷から解放され救われるということを旧約時代に指し示し続けたのが〈過越〉でしたが、その「本体」であるイエス・キリストの十字架の死がいよいよ目前に迫っていたのです。

〈十字架につけられるために〉イエスは〈引き渡され〉なければなりませんでした。

すぐ後で分かるように、〈弟子たち〉の一人ユダがイエスを裏切り、引き渡すことになります（「引き渡す」とも「裏切る」とも訳されている言葉は原語では同じ言葉です）。

イエスはユダによって裏切られ、祭司長たちや律法学者たちに〈引き渡され〉たということは事実ですが、根本的には父なる神が御子イエスを〈引き渡〉しなされたのです。

〈私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神〉（ローマ 8:32）と使徒パウロは言います。

この父なる神の御意思（みこころ）、ご計画に御子イエスは〈自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。〉（ピリピ 2:8）

父なる神が意思し、計画された十字架の死に御子イエスが完全な従順をもって改めてお応えになったまさに〈そのころ（そのとき）〉〈祭司長たちや民の長老たちはカヤパという大祭司の邸宅に集まり、イエスをだまして捕らえ、殺そうと相談した〉（26:3,4）のです。

パリサイ人たちがイエスを殺そうという相談はイエスがガリラヤで教えておられたときにも既になされていました（12:14）し、エルサレムに来てからも祭司長たちとパリサイ人たちはイエスを捕らえようとし（21:46）、ことばの罫にかけようとし（22:15）していました。

彼らはエルサレム神殿での最後の論争にも負けてついに〈だれ一人、一言もイエスこたえられ〉ず、〈もうだれもあえてイエスに質問しようとはしなかった〉（22:46）のです。

「わざわざ、偽善の律法学者、パリサイ人。」とのイエスの言葉（23 章）を聞いても悔い改めようとせず、ついに〈イエスをだまして捕らえ、殺そうと相談〉したのです。

彼らには神に対する真の恐れはなかったのに（そしてそうだからこそなのでしょう）、〈彼らは、「祭りの間はやめておこう。民の間に騒ぎが起こるといけない」と話していた〉（26:5）ように、人間に対する恐れだけはあったのです。

〈祭りの間〉がだめならいいのはその前なのか後なのか、ますます不安になり、不正な〈だまし〉ごと（嘘偽り、策略）を考え出し、悪に悪を重ねて〈神の正しいさばきが現れる御怒りの日の怒りを、自分のために蓄えてい〉る（ローマ 2:5）状態でした。

やがてすぐにユダの裏切りを手始めとして彼らの悪は実行されることとなりますが、しかしいくら「祭りの間はやめておこう」と彼らが考えたとしても、イエスは「二日たつと過越の祭りになります。そして、人の子は十字架につけられるために引き渡されます。」と断言されたのであり、そのイエスのみことばこそ確かであり、その通りになるのです。

〈大祭司〉〈祭司長たちや民の長老たち〉、そして後のユダ、ピラトなど、また弟子たちも含めて様々な人間たちの思い、願い、計画によってイエスが〈十字架につけられるために引き渡され〉たのではなく（たとえ人間の目にはそう見えても）、実は天の父なる神の意思により、御子イエス・キリストの御父への従順によったのだということを私たちは知らなければなりません。

〈死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって生涯奴隷としてつながれていた人々を解放する〉（ヘブル 2:14,15）イエスの勝利、神の勝利を知り、信じなければなりません。